

坂のなかの世界

朝永振一郎

朝永振一郎

鏡のなかの世界

著者略歴

1906年東京に生れる。1929年京都大学理学部
物理学科卒業。1965年度ノーベル物理学賞受
賞。現在 東京教育大学教授・日本学術会議
会長。編・著書 「量子力学」Ⅰ・Ⅱ「量子力学
的世界像」,「極超短波磁電管の研究」,「物理
学読本」ほか。

「鏡のなかの世界

© 1965 Misuzu Shob.

昭和40年12月8日 第1刷発行

昭和43年9月25日 第8刷発行

¥ 400.

著者 とも なが しん いち ろう
朝 永 振 一 郎

東京都文京区本郷3丁目17
発行者 北 野 民 夫

東京都板橋区板橋4-47-7
印刷者 山 田 博

発行所 東京都文京区 株式会社 みすず書房
本郷3丁目17
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

三陽社印刷・鈴木製本

はしがき

この本の名を「鏡のなかの世界」としたのは別に大した意味もない。顔の前にかがみをかざして、それにあたりをうつつしながら、家の中を部屋から部屋へ歩きまわる。こういう遊びを子どものころよくやったことがある。こうすると、毎日みなれてたいくつなわが家が、見知らぬ別の家のようにみえる。それがたのしみであった。

子どものこの鏡あそびのようなきもちで身のまわりのことについてあちこちにこっそり書いた雑文を、みすず書房の松井君がみつつけて、本にしろという。そういうわけでこの「鏡のなかの世界」が世に出ることになった。しかし、子どもならよいとして、一人前の男が鏡あそびばかりではとい

う考慮からか、いくらかは現実世界に関する論説もつけ加えなさいというのが松井君の考えである。

それで、この本のおしりのほうにいくつか野暮なものもはいることになった。読者も諒とされよ。

昭和四十年十一月

著者

目 次

まえがき

ボロ家の楽しみ

学生気質の今と昔

ボロ家の楽しみ

写真屋さんについて

わが放浪記

北京の休日

うれしい京ことは

大学と学長

子どもの情景

子どもの情景

今の子どもと昔の子ども

体育と私

わが師・わが友

48 42 36 32 28 23 17 12 8 2

滞独日記

わが師・わが友

十年のひとりごと

鏡のなかの世界

私と物理実験

鏡のなかの世界

数学がわかるというのはどういうことであるか

人間・社会・科学

かなしい現実

暗い日の感想

科学者の自由な楽園

人間・社会・科学

科学と科学者

204 177 161 146 142

136 130 124

117 103 54

ボロ家の楽しみ

学生気質の今と昔

学生かたぎの今と昔という題をあてがわれたが、この今昔の比較を適正に行なうことはむずかしい。なぜかというのと、昔はこちらも学生であったのに、今では教師であって、したがって見る角度が同じにならない。けれども、論文を書くわけではなくて、正月号の随筆のことであるから、あまりむずかしく考えることもあるまいと思つて筆をとる。

今の学生は総じて風采がよい。昔は敝衣破帽という趣味が流行していて、あたまの毛はぼうぼうにし、ひげもそらず、きたない着物、やぶれた帽子が学生の特徴になっていた。今ではみんなこざっぱりとしている。昔でも大学の上級になり卒業が近づくと、そんな反社会的

な趣味もすすれてきて、見ちがえるような好青年になってくるが、今では始めから終りまでほぼ好青年である。

今の学生は大体において紳士的である。男子学生が女子学生に対して特にそうである。これは男女共学の大きな成果であらう。昔は合同ハイキングなど夢にも考えられなかったから、女性なんかには用はないといった顔をして、敝衣破帽でうつぶんを晴らしてはみたが、そのくせ毎日の電車で会うメツチェンにひそかな慕情をいだいたりした。

今の学生は歌がうまい。昔の学生は大部分音痴であつて、寮歌など原譜どおり歌われたことはなかった。譜のよめる学生などほとんどいないから、歌は耳から耳への伝承でひきつがれていき、したがつて時がたつにつれて変調してくる。多くは単純化され、長音階のものはきまって短音階になってしまう。短音階の方が、何となく青春の日の感傷にうったえるのであつた。ところで今の学生の音感はずしく、去年の桐葉祭のときのように、ラジオに出演し、即席に作曲して歌うようなこともできる。これはたのしく、うれしく、思えば夢のようである。昔ものでアロハ・オエがちゃんと歌えるなどというのは例外である。しかし、時と所かま

わず放歌高唱する傍若無人ぶりは、今が昔にかなわない。

今の学生の中に機知とユーモアを解するものを多く見ることはうれしい。テーブルスピーチなど、その点ではなかなか優れたのがある。昔でも寮祭や学園祭などで今と同様、機知あるおもしろい余興や展示などがあつたが、スピーチとなると一向おもしろくなかつた。昔のスピーチは雄弁を競うのが目的であつて、美辞をならべて天下国家を論ずるのであつた。そしてしゃべっているうちに、聴衆よりも自分自身が感激してくるのであつた。

お酒は今も昔も学生生活になくはならぬものの一つであるが、酔いかたは同じであらうか。昔は酔うといろいろ悪事を働いたものである。飲み屋から灰皿とか徳利とかをちよるまかしてくる。ある学生は、そんな小さなものはつまらん、火鉢をと思つたが、これは成功せず、座ぶとんでがまんした。帰りみちであちこちの看板をかけかえたり、ポストの上に登つて演説したり、そんなことをした。あるいはまた泣き上戸がいて、悲しい悲しい失恋の体験を涙にむせびながら語り、それをお願い泣きしながら慰める友情あつたものもいた。今はどうであらうか。残念ながらデータを提供してくれる学生がいなしい、先生と一しよに飲むとき

はこんなことはない。

昔アルバイトといえば学術論文を書くことであつた。今、アルバイトは学資や小づかいをかせぐことであるが、その意味のアルバイトは昔はあまりひろく行なわれていなかった。昔の学生は世間知らずで、今の学生は世故にたけていて、経済観念などかくだんに発達しているそうであるが、これはアルバイトの大きな効果であろうか。

勉強は学生の本職であるが、これについては昔と今のちがいよりも、学生同士間のちがいの方が大きいようだ。いつの世にも教師を驚嘆させるほど勉強熱心なものもあり、また教師をア然とさせるほどの怠けものもあり、それは人間の本性に根ざす万古不易の現象のようである。ただ、本を読んでいるという点では昔の学生の方が平均において上ではないか。昔は今とちがって、一般教養が学科になかったけれど、たとえば理科の学生でも、哲学や文学の本を読まないと仲間の尊敬が得られないので、わからなくても西田哲学の本を持ちあるいたり、ゲーテやトルストイに感激したり、ドストエフスキーを読んで深刻な顔をしたりした。そして人格の形成とか個我的完成とかがうたわれ、個性の強い人間が尊敬された。そして人生と

か恋愛とかを論じ、感激とか熱情、そうかと思うと懷疑とか虚無とか、そういうことばが好んで使われた。

ところが、个性的であれということがおかしな形であらわれた。敝衣破帽も関係があるが、奇行をもてはやし、奇人に人気があるということである。俗習のよしとするとともに、わざと外れたことをやる。そんなことに人気があった。しかし考えてみると、今でも実存主義者とか、ピート族とかいうのがあるそうで、これも人間の本性に根ざすところであろうか。

今の学生はなかなか組織作りがうまい。職掌がラゼンガクレンにはいささか閉口であるが、この能力がいろいろの面で善用されれば結構である。ただ組織が個人をおし殺すことのないようにと願いたい。個我の確立の上になつた組織であつてほしい。どんな機械でも不完全な部品で作つたのでは運転しない。これは組織と個人というむずかしい問題であるが、この問題を学生自身の問題として考えていくことはよい体験になるだろう。昔の個人の完成は多くひ弱いもので、学生が一人社会に出るとともに雲散霧消するか、または卑小なアウトサイダー的なものに終つてしまいがちだつた。それは個我が対立物としての組織とともに育てあ

げられたものではなかったからかもしれない。

いろいろならべてきたが、昔の学生は内向的、思考的、今の学生は外向的行動的という図式が心にかぶ。しかし、あまり単純化することは問題であろう。昔でも外に向って大いに行動したグループがあったし、今でも目を内にむけて思いめぐらしている学生もある。同一の人間の心の中にさえ、青年時代には、互いに矛盾し相あらそう性向がいくつも共存しているものであって、だからこそ青年は成長していくのである。いわんや、学生全体としてみればいろいろ考えのちがう者がいることは当然であり、またそれは望ましい。また、今と昔をくらべるといふような場合には、どうしても目立つ事例だけが取上げられることになる。けれども昔も今も大多数の学生は平凡で、中ぐらい勉強し中ぐらい怠け中ぐらい思考し中ぐらい行動し、また楽しみも悩みも熱情も懷疑も中ぐらいの連中であろう。そして、そういう目だたなかった連中のなかから後に意外な人物が出てくるがよくある。

人類社会という複雑な有機体は、そういういろいろな人間をすべて必要としているのであろう。

ボロ家の楽しみ

うちの大学はいま本館建築のさいちゅうで、これができると少しは立派になりそうだが、今までは日本有数のきたない大学だった。少なくとも東京では最もきたない大学であった。特に桐花寮という寄宿舎は悪名高いものであって、映画「どん底」の場面そっくりで、こういうところに住む学生たちはたまったものではないかもしれない。しかし、学生諸君にはお気の毒ながら、見物して話のたねにするのにはなかなか乙なものであって、今年度中にとりこわしになるのが、ちょっとおしいような気がする。

むかし京都の中学校にいたとき、この学校は日本最古の中学だといって威張っていたが、

そのぼろさ加減も日本最高であつて、床にはいたるところに穴があり、天井は波のようにうねつていて、雨が降ると、雨が漏る、というよりも、天井から滝がかかつてきた。悪童たちはよく教室の中で傘をさしてふざけたものである。高等学校に入ると、その寄宿舎がまた相当地なもので、おまけに学生たちの間に部屋をきれいにしない趣味が流行していたので、そのきたなさは環をかけた有様であつた。

こういう環境で教育されると、どうも、あまりきれいな建物の中に入ると窮屈で、そして机の上をきちんと整理したり、身のまわりをちりひとつないようにする、などということには面倒くさくておっくうだという悪い習慣がついてくる。そんなわけで、いつかアメリカに行つたとき、あまりにもちゃんとした家において、雨が降つても天井に雨漏りの音一つしないのがものたりなく味気なく、ついにホームシックにかかつた。

雨が漏つたか何かで天井や壁に妙なしみができていると、病氣などしたとき退屈をしのぐのになかなか役に立つ。しみを見ていると、それがいろいろ不思議なだけものに見えたり、ドーミエえがくところのグロテスクな人物の顔に見えたりする。数年まえ、ドイツに旅行し